

大慧語録の基礎的研究（上）

石井修道

一はじめに

駒沢大学図書館に所蔵される貴重な明藏の中にやや小さめの一巻がある。一六五号の説感武字函にあたる『大慧普覺禪師語録』三十巻に、『大慧普覺禪師宗門武庫』と『大慧普覺禪師年譜』がそれである。なぜこの一套のみがやや小さいのか不明であるが、個人の語録としては『明覺禪師語録』六巻をはじめとして、『円悟仏果禪師語録』二十巻と『天目中峯和尚廣録』三十巻が大慧の語録に相前後して入蔵してはいるが、明藏の続蔵や又続蔵の膨大な語録類に比べればわずか四人の語録であり⁽¹⁾、宋版の入蔵に至っては大慧の語録のみであった。やや小さめの一套がなにかしら個人の語録が入蔵するということには重要な意味があることを暗示しているようと思われる。

近年柳田聖山教授が「大藏經と禪録の入蔵」（印仏研究二十一号）の論文で述べられているように、禪録の入蔵というのは大事件であった。ここに大慧語録をとりあげたのは、宋版大藏經に最初に入蔵した個人の語録であるが、その入蔵の過程および大慧の語録そのものに関しても整理しておかねばならない多くの問題があるからである。昨年度の駒沢大学仏教学部研究紀要第三十号に「宏智廣録考」として宏智の語録の一応基礎的な考察をしたので、宏智と常に対比される大慧の語録も是非考究する必要を感じた訳である。

大慧の語録の研究は入蔵されたこともあるって最も整理された語録・廣録であるから、禪の個人の語録の基本となり、影響という点からも考えると必要なものといわなければなるまい。禪の語録は唐代に多く出来たけれども、木版印刷技術の進展などもあって、北宋の太祖が蜀の成都で大藏經板を雕造

させた頃を契機に一般化の萌芽がみえた。その後の語録の出版については詳細な検討を必要とするが、現存する最も古い禅籍類の出版は、重版や再版をふくめて、多くは北宋末から南宋初に現われるといつてよい。

多くの禅籍の中からまず先がけて個人の語録が入藏されたのが大慧語録であつて、この語録の入藏と大慧派の動きとは無関係ではなく、この語録の分析は当時の禅林を知る上でも必要なことになると思われる。今回は特に大慧語録の出版と入藏の過程および語録の構成を中心として問題をみてみたい。

二 大慧の著作の開版について

大慧の著作というと入藏された三十巻本で大成されたかの感があるが、六十巻とか、八十余巻あつたともい⁽²⁾い、三十巻では尽くされていなかつた。大慧の現存する著作の別行本などを整理してみると大きく四つの系統に分けられる。

甲 三十巻本大慧普覺禪師語録

『大慧語録』といえば大きく一つに分けることができる。それは宋版に入藏された三十巻本『大慧普覺禪師語録』つまり広録と呼ぶにふさわしいもの（三十巻のうち十二巻がまた「大慧普覺禪師語録」とい、古くは一冊本であった。）と二巻本『大慧普覺禪師語録』一般に『大慧禪宗雜毒海』とか単に『雜毒海』といわれるものである。その外天理図書館蔵（三井家旧蔵）の五山版『大慧普覺禪師書』も『大慧普覺禪師語録』と呼ばれているし、駒沢大学図書館蔵のものにも、成竇堂所蔵のものにも外題は語録の名を冠しているものもある。

二巻本『大慧普覺禪師語録』（古くは一冊本であり、以下早大本あるいは『雜毒海』と称す。）のことは後で問題にするとして、三十巻本の『大慧語録』についてまず問題にしてみよう。

乙 二巻本大慧普覺禪師語録および大慧普覺禪師宗門武庫 丙 大慧普覺禪師普說 丁 正法眼藏

大慧が他の著作の出版に関与したというものはこれまた非常に多く、このことは大変問題を含んでいるので、一つ一つ吟味を必要とする。ここでは一応大慧の著述とされるものに

限り、特に大慧の著作の原初形態を明すことを中心として以下していくことにする。

明藏の三十巻の内容は次のとおりである。

- | | |
|----------|------------|
| 卷一～四 | 住径山能仁禪院語錄 |
| 卷五 | 住育王広利禪寺語錄 |
| 卷六 | 再住径山能仁禪院語錄 |
| 卷七 | 塔銘 |
| 卷八 | 住江西雲門菴語錄 |
| 卷九 | 住福州洋嶼菴語錄 |
| 卷十 | 雲居首座寮秉弘語錄 |
| 卷十一 | 語錄（頌古） |
| 卷十二 | 偈頌 |
| 卷十三～十八 | 讚伝祖 |
| 卷十九～二十四 | 普說 |
| 卷二十五～三十一 | 法語 |
| A 卷一～十二 | 語錄 |
| B | 普說 |
| C | 法語 |
| D | 書 |

以上の三十巻は詳しくは後に述べるけれども、結論的には大きく四分でき、四つの別行本を集めたもので、

大正蔵には増上寺報恩蔵の明本を原本として宮内省図書寮五山版と徳富猪一郎氏蔵五山版の二本を校定したことになっているが、この五山版なるものはいささか複雑である。まず宮内府書陵部には五山版なるものは存在せず、大正蔵が校定に使用したものは開元寺版の宋版大蔵經であつたらしい。

福州版の宋版大蔵經には東禪寺版と開元寺版の二版があるが、たとえば『東寺經藏一切經目録』では次のように大慧語錄を説明している。

多 大慧語錄 自卷第一 至卷第十一 卷第一（乾道八年正月刊他無刊記）

士 同録 自卷第二十一 至卷第三十一 卷第十一（乾道七年十二月刊他無刊記）

寔 同録 自卷第二十一 至卷第三十一 附大慧普寛禪師普說一卷 卷第二十一（乾道七年十二月刊）

(昭和法寶總目録) 卷一～八二二

一般に日本で所蔵される福州版の宋版大蔵經は開元寺版か、東禪寺と開元寺の混合版のよう⁽³⁾で、大慧語錄は『昭和法寶總目録』でみるかぎり、すべて開元寺版のようである。開元寺版は三十巻となっているけれど、東寺の目録にあるように附巻として普說一巻が加えられて全体では三十一巻である。実際に宮内府書陵部の宋版大蔵經をみてみると、確かに普說が一巻あつて三十一巻となっている。私は現在東禪寺版の大慧語錄の全巻はみていないが、明藏の序文からみると明藏の四つである。この四つの書の成立過程はどうなつているのであるうか。またこの三十巻は果して宋版大蔵經の三十巻を

そのまま踏襲したものであろうか。

もとになつたものが東禪寺版であつたようである。もちろん開元寺版も普説の一巻と最初の序文を除いては、後に詳しく述べるが蘊藏の上進したものもとにしているので全く同一のものといつてよい。一般に東禪寺版が北宋神宗の元豐三年(一〇八〇)に始まり、徽宗の政和二年(一一二二)に成り、開元寺版が政和五年(一一一五)に始まり、南宋高宗の紹興十八年(一一四八)の頃に終つたとされるが、⁽⁵⁾ 大慧語録の場合、この完成の後『仏祖統紀』などのように淳熙三年(一一七六)に東禪開元両寺に勅して天台宗の典籍を追雕した例⁽⁶⁾と同じく、両寺に追雕したことが考えられ、乾道七八年(一一七一—一七二)に同時に成立した。ここに大慧語録の特異な面があるといえよう。

ところで成竇堂の五山版は入蔵された語録によるのではなく、単独にあつたAにあたる語録二巻の宋版の覆刻によるものである。まずわかりやすくするために次に三十巻本を分解して説明することにしよう。但し入蔵された三十巻本全体については後に再考することにして、三十巻本を構成している四つのA・B・C・Dを順序に従つて問題にする。

A 卷一～卷十二の語録

『大慧普覺禪師語録』の名はもともと入蔵した三十巻本の

うち卷一～六を上巻、卷七～十二を下巻とする二冊本に名づけられたものらしい。この二冊本は上下別々に開版され、先に開版された巻上にあたる卷一～六のみをあるいは最初に『大慧普覺禪師語録』と呼んだのかもしれない。

この版の宋版は現在みることができないが、西尾市立図書館岩瀬文庫に元版の二冊本があり、その他成竇堂文庫に五山版の一冊と内閣文庫に江戸初期の写本の二冊がある。岩瀬文庫の二冊本の巻末には、

福州城内淨業寺比丘尼靜德、敬捨鈔六定、刊造斯卷、入于東禪藏院、以廣流通、報資恩有者

泰定乙丑歲正月元日謹誌

とあるから元の一三二五年に福州にて開版されたものである。後に述べるけれども同じ年に開版された法語の元版が岩瀬文庫に存在する。

岩瀬文庫本はタテ二二・五cm、ヨコ一四・二cmの非常に小さい、いわゆる柳田聖山先生のいわれるポケット版である。左右雙邊。有界。十一行二十字。匡郭内がタテ一七・六cm、ヨコ一二cm。版心は「上(下)(丁數)」となり、善慧軒の印がある。成竇堂本については後に述べがおそらく宋版の覆刻になるものであり、岩瀬文庫本も覆宋版の美しい文字で、共に同一系統の文字である。

岩瀬文庫本の内容は、上巻が參學道謙錄、淨智居士黃文昌

重編の住径山能仁禪院語録が六十丁（但し版心に六十・六十一と重複して丁数あり。）、参考慧然録の阿育王山広利禪寺語録が六十二～七十四丁まで、参考道先録の再住径山能仁禪院語録が七十五～八十五丁まであり、あとに塔銘があつて合計八十九である。

下巻は参考悟本録、淨智居士黃文昌重編の住江西雲門菴語録（～13丁）、福州洋嶼雲門菴語録（～16丁）、泉州小谿雲門菴語録（～28丁）、雲居首座寮秉弘（～41丁）、室中機縁（～44丁）、頌古（～64丁）、偈頌（～72丁）、讚仏祖（～79丁）、自讚（～86丁）、下火（～88丁）でできている。

上・下ともに一葉の序があるが、上巻は張浚、下巻は尤焫のもので補写になるものである。岩瀬文庫本は下巻の末が一応「大慧普覺禪師語録」と尾題で終つて、さらに遺偈と張浚の跋と前にかかげた刊記が八十八丁の裏にある。ちょうど上巻が八十五丁で「再住径山能仁禪院語録」の尾題で終り、塔銘が八十六丁～八十九丁に付されているのと同じであるが、成簣堂本、内閣文庫写本のわずかな相違は後で述べるようにこれらの部分である。

次に成簣堂本について述べてみよう。川瀬一馬博士著『五山版の研究』に一応紹介されているので、岩瀬文庫本と比較すると興味深いことがわかるから、ここで川瀬博士の説明をとりあげよう。

南北朝刊。宋大慧宗杲撰。道謙錄。文昌編。二巻。二冊。左右雙邊、有界、十一行二十字。匡郭内、縦五寸七分半、横三寸七分。在來知られている現存唯一の伝本、成簣堂文庫蔵本（一冊。摺下し初印。「清見寺常住」印記あり。）は径山能仁語録第四十五葉以下十四葉〔径山能仁語録（十六丁）・広利語録（十三丁）・再住能仁（十一丁）・塔銘（四丁）〕室町時代補鈔にかかる。版心に助刊の僧名を附刻する。（四一一页）

この説明には補足が四六〇頁にあつて、版心の僧名が判読できるだけ列記してある。

この本を実際に見てみると、元本よりやや大きめのタテ二四cm、ヨコ一六・二cmであり、匡郭内はタテ一七・六cm、ヨコ一二cmの元版とまったく同じ大きさである。現在は川瀬博士の説明にるように一冊しか現存せず、一冊の表紙に「大慧語録・天二之内」とあり、室町時代の補写を除いて、版心は「徑（丁数）」となっているから、元本の「上（丁数）」とは異っている。おそらく成簣堂本は阿育王山、再住径山などの略称が補写の部分の版心にもあつたものであろう。現在成簣堂のこの一本しか現存しないので他に比べることができないが、四十四葉までは全く端正な文字で、前にも述べたように同一の宋版の覆刻になるものであろう。元本は序が補筆になり、それがいつ頃の補筆になるものか私には判定できないが、その点成簣堂本の序はもとの形式をとどめていて、九行

十五、六字で一葉裏表一ぱいに配列されている。

この二冊本はその後の開版も不明であり、伝本もまれであるが、内閣文庫に蔵する江戸初期の写本になる二冊本が貴重なその資料である。この本は帙の上に林羅山の筆と書かれ、上下二冊の完本で、本文は同一の筆になるが、序文は他の筆となり、林羅山の筆がどの部分か私には不明である。この写本は今まで述べて来た元版・五山版とまったく同じように十一行二十字で書写され、誤写を除いてはまったく元版・五山版と同じといってよい。五山版は残念ながら下巻にあたるものが現存しないが、内閣文庫の下巻を元本と比べてみるとき、最後の数紙と遺偈の順序が異っている。

それは岩瀬本には蘊聞、用宣、師昭の請うた自讃がなく、その他自讃の最後に「徳光禪人請讃」の一偈があり、これは入藏された三十巻本には位置が異なるけれどもあり、岩瀬文庫本にはない。つづいて下火となるが、その最後の遺偈が岩瀬文庫本には語録に附されたようになつていているけれども、内閣文庫本は遺偈につづいて「大慧普覺禪師語録」で終り、張浚の跋が付してある。内閣文庫本の序文は張浚・尤焴の両方共に十一行二十字であり、本文の書写の方法からみて忠実に書写されたものか、筆が異なるので本文と同じように書写したものが問題が残る。ただ張浚の跋につづいて興味ある跋が、滄州叟程程許と渤海劉震孫によつて、淳祐十一・十二年(一二

五一・一二五二)に述べられているが、前者に
大慧禪師語録板頃為丙丁童所奪、寺僧德濬、謀再繡梓以惠後学。
とあり、下巻の尤焴の序と関連し、これらの序や跋が重刊のときに付されたことがわかる。この重刊の時には『大慧年譜』も重刊されており、やはり徳濬の手になるものであり、内閣文庫の写本には年譜にもある祖謙の跋があつて、その間の事情を語つているようである。

以上が二巻本の『大慧普覺禪師語録』であり、この巻に相当する語録は、他には三十巻本のうちの十二巻を別行本にして、巻初に尤焴の序と大慧の真に文宗の贊および如一即非の讃と跋をもつ正保四年(一六四七)の版の十二巻六冊がある。これは松ヶ岡文庫に存するといい、この版の後刷りになるのが駒沢大学図書館に存し、十二巻三冊となつていて、この正保四年本の系統が正藏の原本である。

B 卷十三～十八の普説

『大慧普覺禪師普説』と呼ばれるものにも二種類あり、四巻本と一巻本である。卷十三～十八に相当するものは、一巻本で、普説全体の量の約五分の一である。一般に別行本で多いものは四巻本の普説である。この四巻本の普説については、後に丙の項で述べる。

一巻本の宋版は現在見ることができないが、覆宋版の鎌倉

末期の五山版であると川瀬博士が紹介しているものが、京都大学人文科学研究所の松本文庫に現存する。私は複写本を所有するが、もと龍井庵に常住されていたもので、左右雙辺、無界（川瀬博士は有界と紹介）十一行二十字。匡郭内タテ二〇・三cm、ヨコ一五・五cm、版心は「普説（丁数）」、卷末に「秦魏國太夫人田氏悟眞助縁」の宋版の原刊記を附刻している。これは参考慧然が録し、淨智居士黃文昌が重編したものである。

また正保四年本の語録の後刷りと全く同じ体裁をもつ、おそらく正保年間版の後刷りであろうと思われる上下二巻一冊

本が駒沢大学図書館（駒大本と称す。）に存する。四周雙辺、無界、十一行二十字。返り点や送りがながあるため匡郭内がタテ二〇・七cm、ヨコ一六cmのやや横に広い版であるが、五山版と行数字数を同じくしている点は注意してよい。

ところで開元寺版（金沢文庫所蔵の宋版、卷一と付巻がないが、宮内庁本より保存がよいのでこれを使用する。）、明藏、大正藏などは、十四の普説が収録されているが、五山版は十五、駒大本や正藏は十四であり、大正藏とは少し異なるので、次にそれらを一覧表にしよう。

順番	内容					卷大正数藏
	1	2	3	4	5	師到雪峯值建菩提会請普説
15	13	13	14	14	15	大正数藏
254	93	177	177	249	249	五山数藏
7	1	2	4	5	7	順五山版
7	1	2	4	5	7	順駒大番本
7	1	2	4	5	7	順正番藏
						卷駒大本・正数藏

上

	14	13	12	11	10	9	8	7	6
孟郡王請普說	孫通判請普說	鄭成忠請普說	錢計議請普說	新淦縣衆官請普說	禮侍者斷七請普說	悅禪人請普說	傅經幹請普說	劉侍郎親書華嚴經施師仍請普說	傳菴主請普說
	18	18	17	17	17	16	16	15	15
47	154	104	114	75	141	135	123	76	59
15	14	13	12	11	10	9	8	6	3
14		13	12	11	10	9	8	6	3
14		13	12	11	10	9	8	6	3

巻するときに便宜をはかったのであろうか。また五山版は一冊本であるが駒大本は上下に分け下巻には内題があるので五山版に比べて一行ずつずれている。正蔵のもとになつたものは、この駒大本かその系統で、前に推測したように駒大本のもとになつた正保年間の版と考えられるが、詳しい事情は不明である。

C 卷十九～二十四の法語

この法語は宋版も五山版も現在見ることができない。両足院に室町時代の刊になるものがあると『禅籍目録』にはあるが、川瀬博士の『五山版の研究』にはとりあげられていない。その点岩瀬文庫に蔵する元槧本は貴重な資料ということができるよう。この元槧本は先に示した語録の元槧本と同じ一三二五年の開版になるもので次のようない刊記をもつていてる。

福州在城越山禪寺住持比丘与渝、刊造斯卷、該鈔六定、入于東禪
藏院、用広流通、報資恩有

泰定乙丑歲良月 日謹誌

この本はタテ一四・八cm、ヨコ一五cmで語録よりやや大きめのものである。左右雙辺。有界。十一行二十字。匡郭内がタテ一七・六cm、ヨコ一二cmで語録と全く同じであり、宋版の覆刻版といつてよい。版心は「法(子数)」となり、合計八十八丁である。同じ元槧本といつても、この法語は「雲頂山

大明禪寺塔頭常住也」とあるから伝持されてきたところは異っているのである。最初の一葉は補写であり、「大慧普覺禪師法語、參學道先錄、淨智居士黃文昌重編」ではじまり、分巻していない。

次に「寛永十七庚辰歲正月吉旦、二条通觀音町風月宗智」の刊行になる寛永本三巻三冊が駒沢大学図書館に存す。この版はタテ二八cm、ヨコ一七・三cm。四周雙辺。無界。十一行十八字。匡郭内タテ二〇cm、ヨコ一四・五cm。版心「大慧法語(中)」「下」のみ巻数文字を添える。(丁数)となり、上34丁、中34丁、下30丁でなつていて。普説で考へた正保年間本にも少し早い寛永年間本もあるとも考へられる。法語に関しては正蔵のもとになつたものは寛永十七年本で、小坂機融先生はこの版の三巻一冊本を所蔵されている。

D 卷二十五～三十の書

大慧書は前述の語録類に比べて比較にならないほど多く開版され、また読まれた本といふことができる。この書は朝鮮仏教を考える上でも大切なもので、朝鮮においても何度も開版されたものである。この書の宋版も現存しないが、『五山版の研究』によると、天理図書館蔵になるものが覆宋版であり、原刻は鎌倉末期であるが、補刻もあり南北朝極初期の刊とある。參學慧然錄、淨智居士黃文昌重編。二巻二冊。左右

雙辺。有界。十一行二十字。匡郭内タテ二一・四cm、ヨコ一五・八cm。版心は「書上(下)(丁数)」である。『五山版の研究』によると五山版だけでも五種類があげられている。私がみた中でも今までの別行本と異った大版がみられ、五山版でも新しい版ではあるが、成竇堂所蔵のものはタテ三二cm、ヨコ二一・二cmもあり、駒沢大学図書館に同じような大きさの江戸期のものがあり、嘉靖二十二年の岩瀬文庫所蔵の朝鮮版もタテ三〇・六cm、ヨコ一〇・八cmもある大型版があり、匡郭内の大きさはほとんど同じであるから、初心者に書き込めるようにした教科書として流布したものと推測される。ここでは『禪籍目録』などや註釈書などに説明を譲り、宋版の版式を明かにすることを中心にして深くたち入らないことにしようと。他の著述もみてきた正藏のもとになつたものは大慧書の場合、おそらく一冊本であるから寛永十九年本と思われるがこの本の開版は多くあるので別の版とも考えられて決めることはむずかしい。

以上三十巻本を分巻して大きく四つに、分けてみたが、ここから生ずる問題も他の著作を述べたあとの方がわかりやすいと思われる所以で、一応次の書を紹介してみよう。

乙 二巻本大慧普覺禪師語録および大慧普覺禪師宗門武庫 大日本続藏經は多く中国の禅者の語録をあつめ、現在その

原本も失われたものが多くあるという。大慧の語録は日本校訂正大藏經に、十二巻本『大慧普覺禪師語録』、五巻本『大慧普覺禪師普說』(四巻本普說に付して上下一冊本を加えたもの)、一巻本『大慧普覺禪師法語』、一巻本『大慧普覺禪師書』を收め、三十巻本の別行本と別行本の四巻本普說を中心にもとめられている。それを補足したのが大日本続藏經で、香港影印続藏經会印行の一一二巻に二巻本『大慧普覺禪師語録』と一四二巻に『大慧普覺禪師宗門武庫』一巻があり、一一八巻の『正法眼藏』六巻で、一応大慧の著作とされる現存のものはすべてとなる。

この二巻本『大慧普覺禪師語録』は『大慧禪宗雜毒海』ともよばれていたこと、二巻本の前半と『大慧宗門武庫』とがほとんど同じ内容であることなど指摘はされていたが、その関係は実は明確ではなかつたといつてよい。『大慧』(弘文堂書房、昭和十六年八月)の著者の市川白弦教授は「大慧武庫に関する疑義」として、

私は「大慧武庫」全篇を大慧の所説と見る従来の通念、まして本書を以て「於于宗門」最有功書とするが如き見解に、疑を懷くものである。(二一〇〇頁)

と結論し、問題の多い書物であるとされてきた。さらに複雑さを増したのは、続藏經に收められている『雜毒海』の原本である。

この『雑毒海』の原本は、早稻田大学図書館にある宋版であると思われるが、宋版の『雑毒海』以外に伝本が現在のところなく、『禅籍目録』にかかげられている珍皇寺本が果して早大本と同一のものかどうか疑わしい。この珍皇寺本は展観目録に出たものというが、実はこの年代を決定する祖慶の跋は五山版の普説にも有するものである。詳しくは丙の四巻本普説を述べたあとで考察することにしよう。

A 早大本大慧普覺禪師語錄

続蔵経の原本の早大本について述べてみよう。この本の大さはタテ二四・七cm、ヨコ一七・五cmで一冊本である。「大慧普覺禪師語錄」と首題があり、参考比丘法宏道謙編となつてある。左右雙邊。有界。十一行二十字。匡郭内七・六cm、ヨコ一二cm。版心が「雑毒(丁数)」とあり、八十五丁までほとんど刻者名の「塙」の姓が存す。版心が一部蟲蝕のためどこまで「雑毒」の文字があるか不明であるが、おそらく四十八丁までであろう。四十八丁よりそのあとは丁数のみがつづき、七十丁で終り、七十丁の裏には糸音がある。ところで早大本は裏打補修の時順序を誤ったようであり、続蔵本は順序を正してはいるが、上下の一巻に分巻した。七十一丁より八十五丁まで「讚方外道友」で、版心には「贊(丁数)」とあり、八十六丁から九十四丁の表まで「讚仏

祖」で、版心には「贊(丁数)」とある。九十四丁の裏には四巻本普説の巻三の最後の一紙が入り込んでいる。その後に二葉の祖慶の跋がある。

B 大慧普覺禪師宗門武庫

大慧普覺禪師宗門武庫の宋版は現在見ることができない。覆宋版の南北朝初期刊行の五山版があり、大東急記念文庫に現存する。この本の大きさはタテ二五・八cm、ヨコ一九cmの一巻一冊本である。左右雙邊。有界。十一行二十字。匡郭内タテ二〇cm、ヨコ一五cm。版心に「武庫(丁数)」があり、巻首に李泳の序二葉があり、武庫は四十九丁までで、『雪堂行和尚拾遺録』十八丁は補写になるものである。『五山版の研究』によると、五山版でも三種類が存する。

次に寛永十四年丁丑仲春吉旦に二条玉屋町村上平楽寺の開版がある。この本の大きさはタテ二八cm、ヨコ一七・五cm。一巻一冊。四周单邊。有界。十一行二十字で句読訓点は新たに加えられているが、五山版をもとにして開版されたものである。版心「武庫(丁数)」が四十九丁まで、つづいて版心「雪堂(丁数)」が十八丁まである。巻首の李泳の序も五山版の書体を保っている。

その外冠註本、頭書本もあり、臨濟宗では重んじられてよく読まれたことは市川教授の指摘しているごとくである。

丙 四巻本大慧普覧禪師普説

四巻本普説の宋版は現存しないが、先に述べたように卷三の最後の一紙の半分が早大本の『雑毒海』に誤つてまぎれ込んでいる。これは五山版と比較した場合あきらかに異つてい。大東急記念文庫にある鎌倉末期の五山版が現存する最も古いもので四巻四冊の完本である。四周单辺。無界。十一行二十字。大きさはタテ二六・七cm、ヨコ一八・三cmで宋版に比べてやや大きい版である。匡郭内はタテ一七・七cm、ヨコ一二・四cmである。版心は「普説一(丁数)」となり、卷二以下は「普説(数)」となつていて。文字はやや小さめのもので、全巻に朱点がある。卷首には淳熙戊申の祖慶の序と紹熙元年の祖慶の跋があり、序は四行七、八字で二葉あり、序の版心には一と二とあるのみで無界。四周单辺。匡郭内がタテ一七・八cm、ヨコ一二・四の大きな文字である。早大本の序は左右雙邊ではあるが、文字は全く同じといつてよい。ついで二葉の跋があるが、六行十二字で早大本の序と同様の関係にある。版心には三、四とあり、五より普説の本文がつづいている。卷一は九十四丁、卷二は九十六丁、卷三は九十七丁、卷四は九十四丁となつていて。

前述した最も興味を引く卷三の九十七丁であるが、卷三の最後の「忍臨機」より「入如来地」の八十四文字と「大慧普

覚禪師普説卷第三」の十一文字がぴったりと一致する。(早大本には上部に補写がある。)ただ序や跋でも指摘したように早大本は有界であり、左右雙邊で異なる点は、五山版の四巻本は覆宋版であることと宋版の普説の一紙が早大本に存することを意味する。ここから派生する問題はあとで述べる。東洋文庫蔵の四巻本普説も大東急記念文庫本と同様であるが、本の大きさがタテ二四・七cm、ヨコ一四・五cmで、これが宋版の大きさではないかと考えられる。その他にも日光天海藏とか天理図書館には卷二の零本(一冊)があるという。また成竇堂の零本三冊は普説卷四にあたり、30丁、62丁、94丁で三冊に分けたものである。あるいは天理図書館の所蔵本ともとは同一であつたのかもしれない。

語録と同じように駒沢大学図書館には、正保三年版とその後刷の本が現存しており、正保三年本系統が後に正蔵に收められている。正蔵は先の三十巻本のうちの普説一冊(上・下)とともに五巻としてまとめられている。

丁 正法眼藏

この大慧の『正法眼藏』については印度学仏教学研究第二十卷二号に「大慧宗果とその弟子たち(三)——大慧『正法眼藏』と『聯灯会要』——」と題して正法眼藏の意義を述べたとき開版についても解れたのでここでは省略する。ただ宋版

についても、また考察しなかった五山版についても、江戸初期の版も簡単に解決できない問題を含んでいて、他日稿を改めて検討したい。

三 大慧語録の入蔵

大慧の著作の開版について十分とはいえないまでも、一応私の実際に見ることができたものを中心として述べた。現在

大慧の著述の古版の単行本一覧表

見られる可能なかぎりにおいて、宋版・元版・五山版の開版の事情が明確にできだし、今回問題にしようとする大慧語録の原初形態および入蔵の過程をみる場合の一応の資料は検討したので、ここで前節で問題にして来たことを整理し、次の論をすすめる上でも必要であるから、まず次に一覧表をかかげることにしよう。

界				匡郭の種類			匡郭内大きさ・タテ・ヨコ				丁数					
五	覆	元	宋	五	覆	元	宋	五	覆	元	宋	五	覆	元	宋	五
	有界	有界			左右雙辺	左右雙辺		17.6 12	17.6 12			89	89			
	無界	有界			左右雙辺	左右雙辺			17.6 12			88				
	有界	有界			左右雙辺	左右雙辺		20.3 15.5				91				
	有界	有界			四周雙辺	左右雙辺			17.6 12			88				
有界				四周雙辺	左右雙辺			20 15	20 15			(但し通算45ダブル)	通算89			2
		有界			左右雙辺	左右雙辺				17.6 12						
	有界	有界			左右雙辺	左右雙辺							94			
	有界	有界			左右雙辺	左右雙辺			20 15			49				
無界		有界	四周單辺		左右雙辺	左右雙辺		17.6 12				94 96 97 94			(97)	4
		有界			左右雙辺	左右雙辺				23.2 12.5						83 83 83

重編者					編者				序者				字行数				
宋	五	覆	元	宋	五	覆	元	宋	五	覆	元	宋	五	覆	元	宋	
		黃文昌	黃文昌			道先謙慧然	道先謙慧然			張浚	張浚			11行20字	11行20字		
		黃文昌	黃文昌				悟本				尤熷				11行20字		
		黃文昌				慧然				ナシ				11行20字			
		黃文昌					道先				ナシ				11行20字		
		黃文昌				慧然				ナシ				11行20字			
雜贊毒(丁數)					ナシ			道謙			(祖慶)				11行20字		
		ナシ			道謙			李泳						11行20字			
	祖慶校勘				道慧先、蘊聞			祖慶						11行20字			11行20字
正上(丁中下)					ナシ			ナシ			ナシ						11行20字

刊記		版心		元		上(丁数)		下(丁数)		法(丁数)	
備考		五	覆	元	宋	五	覆	徑(丁数)	普説(丁数)	書上(丁数)	
元は岩瀬 文庫本	元は岩瀬			(泰定二年)							
堂本	文庫本			(泰定二年)							
覆は成簣	庫本	秦魏國太夫人 田氏悟眞助縁		(泰定二年)							
	庫本	元は岩瀬文									
	庫本	五は成簣堂本	ナシ	ナシ							
	本	宋は早大本									
	本	覆は大東急									
	本	五は大東急									
る 宋の一 部によ る	本	宋は宮内庁	ナシ								
	本	宋の一部によ る									

* 宋は宋版、元は元版、覆は覆宋版、五は五山版のそれぞれの略。
 * 空白の欄は今後の発見によって埋まることを期待するが、宋版などでも一種類とは限定できないであろう。

この一覧表の諸問題を解決するために雲臥庵主曉望によつて出された関連する問題を述べてみよう。

『雲臥紀談』の末尾に附された徑山の遜庵無言首座禪師友兄にあてた「雲臥庵主書」は大慧を研究するとき非常に大切な問題を提供している。その手紙の主張の最も大きな点は祖詠の『大慧禪師年譜』一冊の誤りを述べるにあつた。この

「雲臥庵主書」の主張を正確に理解するためには、祖詠の『大慧禪師年譜』が存するならば比較検討できるのであるが、現在は祖詠のもののは存在せず、現存のものは雲臥書により訂正されたものである。現存する『大慧年譜』の最も古いものは立正大学図書館に蔵する「宝祐癸丑天台比丘徳清募緣重刊于徑山明月堂」の刊記をもつ一二五三年重刊の宋版であ

る。この本は古くは臨川寺にあつたもので、それが貞松山相輪檻に伝承され、大正五年八月二十五日に立正大学図書館に寄贈されたものである。

左右雙邊。有界。十一行二十字。匡郭内タテ一九・六cm、ヨコ一五・五cm。版心は「年（丁数）」とあり、65丁の一冊本である。最初に祖謙の跋が一葉、つづいて張掄の序が一葉あり、最後に華藏宗演の跋が一葉あつて、前述した刊記が付されている。日本において開版された駒沢大学図書館所蔵の寛永二十年本は、四周雙邊、無界で返り点は付されているが、この南宋重刊版の文字をそのまま覆刻しており、覆宋版の五山版をさらに覆刻したとも考えられるが、宋版の文字を比較的忠実に覆刻したことがうかがえる。但いくつかの文字の誤刻もあつて立正大学本を一応ここでは使用することにしよう。張掄の序はもとの祖詠の年譜に付されたもので、淳熙十一年（一一八三）四月になる。雲臥の書はこの年譜が刊行されてすぐには批判したものである。華藏宗演はこの雲臥の書をみて、開禧乙丑年（一一〇五）に六十余處を改めて現在みられる年譜をつくり、まもなく開版され、前述のごとく、立正大本はその宗演本の重刊となつている。

以上のような過程で成立した年譜のものと記録で、雲臥の批判した内容の中から今回問題としている点をまとめてみるところであり、一は大慧語録の成立であり、一は大慧宗門武庫

の疑義である。この雲臥の批判をみながら問題を展開してみよう。

まず雲臥庵主書に次の記事がある。

又云、兄与璉密裡於老師語錄、節其綱要離為五冊。既節則是、刪繁去冗、然其間不無去取、似不当揭示於世。徒使叢林增阿難昧矣之歎也。（続藏卷一四八・二三d）

この箇所にあたる改められた『大慧年譜』はもつとも後部に属するが、そこではこの批判に対しても次のようにある。

其八處九会陞堂語要、普說小參讚偈機緣長牋法語、無慮數十方言。參徒道印、編為六十卷、奉置于菴。宗璉、曇密、惟裡、宗演、淨智居士黃文昌、袁其綱要、離為五冊。刊行於世。蒙詔賜、入大藏、同聖教、以求其伝。（立正大学本、六四a b）

この中で雲臥書に述べていらないで新しく加つた人物に宗演と淨智居士黃文昌の名がみえることである。

前の一覧表の中で、入蔵された甲群と乙丙丁群の大きな違いをみい出すならば、甲群のA B C Dのすべてが黃文昌によって重編されていることである。この黃文昌の重編した甲群がそのまま入蔵された三十巻本の母体となつたものか、黃文昌が重編しない以前の五冊本が三十巻本の母体となつたかが問題となる。年譜や雲臥書にみえる五冊とは明かに甲群のことであり、甲群が五冊本であることはAが二冊本で、B C Dが一冊であることは表よりも理解できるであろう。それぞれ

の各冊が、89・88・91・88・89の丁数であることは、分冊の

方法が三十巻本になつたとき、各冊が六巻ずつになつても、

それぞれの丁数がふそろいにならなかつたことからもわかる。現在のところ道印の六十巻本の内容は知ることもできなが、黃文昌の重編とされる五冊本全体のもの形態も不明である。

そこで現存の甲群の五冊本より、少しくこの書の成立過程を推測してみることにしよう。五冊本のうち最も早い成立は

道謙等編になる『大慧普覺禪師語録』であり、『雲臥紀談』

卷下に

大慧先住徑山、語要乃謙有衡陽編次。(前掲書・十八c)

とあり、成簀堂本の完全な序によつてさらに確めることができ。すなわち

大慧普覺禪師語録序

如來正法眼藏、大迦葉一笑而得。其伝回視五千四十八巻之書。如彼黃葉而止兒啼、了無一語仏実有説。上智明徹於此証悟、護持涵養、与道為一息熱、裂網摧邪、淨濁光明、所燭濟物無尽。嘗觀堯舜之世、君臣相与、垂衣正裳于一堂之上、都愈可否、目擊而決意。其君臣之間、所自得者深、毫髮私念不起脣中故、淵默躬行四海說服、祖師直指人心、見性成仏、其亦發明斯道也歟。仏日杲公、得法於圜悟禪師。臨濟宗風、賴以不墜。門人道謙持語錄至。予徧觀詳閱、若決江河、其機鋒峻拔、又將超出圜悟蹊徑。嗚呼、休哉、伝之万世無疑也。公与士大夫、交游厚善。儻見乎

此、而深達窮通死生之分、可以為吾道之助。

紹興乙丑四月八日、紫巖居士張浚序

とあり、一一四七年の序をもつてゐるのである。このときが一冊本であつたかどうか、悟本編の語録を含んでいたかどうかが問題であるが、雲臥紀談の内容および後に上堂を分析するよう一冊本のみで語録は十分に独立しうると考えられる。ただ悟本編の語録に密接な関係があつたことは序者と同じ張浚が二冊目の巻末に次のような跋を付している。

張丞相跋

宗師垂語、切忌錯会。要須識得真妄受用處、方證大自在解脱安樂法也。隆興甲申季夏十日。紫巖張浚書。(参照、大正藏卷四七・八六三a)

この跋は一一六年で序より十七年後のことであり、開版は先きに一冊本としてあつたとしても、この二冊本がここで成立したことはまちがいないであろう。それは悟本編の語録に付された尤矯の序からも想像される。すなわち

大慧普覺禪師語録序

大慧說法、縱橫踔厲、如孫吳之用兵。而廣闊弘深、不可涯涘、如意。其君臣之間、所自得者深、毫髮私念不起脣中故、淵默躬行四海說服、祖師直指人心、見性成仏、其亦發明斯道也歟。仏日杲公、得法於圜悟禪師。臨濟宗風、賴以不墜。門人道謙持語錄至。予徧觀詳閱、若決江河、其機鋒峻拔、又將超出圜悟蹊徑。嗚呼、休哉、傳之万世無疑也。公与士大夫、交游厚善。儻見乎

手、往在春陵永嘉徐棘卿瑄亦貶是邦、未幾忽遷象台、將行憂然涕泣、燁授以所携本、徐卿亟取讀之、達旦不寐、次日欣悅忘憂、與昨日竟然一人也遂携以去。手抄一本、乃見還。後三年徐沒于貶所、臨終殆同游戲、不疾沐浴而逝。此書之靈驗如此。蓋燁之親覩也。徑山潛上人、欲再刻版以廣其伝、因為談此兩則、可勸願見樂施者。士流中因此書悟發者多、不能偏擧也。

淳祐壬子仲冬日晉陵尤燁敬書(参照、正藏三一四一三四八d)

とあつて、内容の点で大慧と朱子との関係を述べた事項で歴史的に疑問とされている問題のある序でもある。⁽⁸⁾この点はここに触れないで今問題にしているところでは、一二五二年に書かれたこの序は径山潛上人の再刻の時求められたものといふ事が明かにいえる。現在正藏は尤燁の序のみが存し、十二巻本の最初に収められているが、これは前述したごとく正保四年本に基づき、この正保本は入蔵された蘊聞上進の本と合されているので、尤燁の序のみの二冊本は存在しなかつたのではないか。尤燁の序は再刻のとき求められて、あくまでも岩瀬文庫本や内閣文庫の写本のように二冊目の最初か語録全体の最初に付されたのである。径山潛の再刻といえば、立正大学の『大慧年譜』が一二五三年に天台比丘徳潛によって径山明月堂で重刊されているから、重刊にはこの徳潛の力によるところが多いといわねばなるまい。

黄文昌の重編が徳潛の重刊と同時になるものであるか。あるいは黄文昌の重編は徳潛の重刊したものとの刊行本にあつたのであるか、という問題が残る。現在の元槧本には上下二冊共にはつきりと「黄文昌重編」とするされている。ここで問題となるのが入蔵された三十巻本であり、この三十巻本と黄文昌の重編の前後関係である。現在のところ語録以外のBCDの普説・法語・書は黄文昌の重編であるが、序文等がないためこれらより推測する糸口はみづからない。明藏のもとになつた東禪寺版の蘊聞の奏劄と徳潛の序は次のようになつている。

進大慧禪師語録奏劄

臣僧蘊聞竊以仏祖之道、雖非文字語言所及、而發揚流布、必有所倣而後明。譬如以手指月、手之与月初不相干、然知手之所指、則知月之所在。是以一大藏教為世標準。于今賴之臣山野微賤、遭值聖明、屢獲瞻望清光、稟承音旨、聖言高遠非凡所及、斯道慶幸有待而興。竊欣希闢之逢、敢陳誠切之懇。伏念臣先師前住徑山大慧禪師宗果、敏悟英發、直受正伝、善巧方便、開悟後學。其平日提唱語要、臣隨處記錄、皆已成書、既為廣錄三十卷、又為語錄十卷。謹繕寫詣闈上進。伏望方機之暇、俯垂省覽、臣又伏見真宗皇帝景德年中、以僧道原所集伝灯錄。頒降入藏。今臣所進先師語錄十卷。欲乞聖慈依上件体例、特賜指揮亦令入藏、用廣流通、使後學皆得預聞、在先師益為不朽。臣無任戰灼、俟命之至取進止。乾道七年三月 日。徑山能仁禪院住持慧日禪師臣蘊聞奏劄(駒大明藏)。

参照、大正藏卷四七・八一-a)

および三十卷の末尾に

謝降賜大慧禪師語録入藏奏劄

臣僧蘊聞、昨於乾道七年三月中、不懼天誅、以先師大慧禪師臣宗

呆語録投進。仍乞特旨、送福州入藏。伏准五月十九日聖旨已送福

州東禪寺入藏訖者。冒昧上陳、方虧罪戾、恩光下逮、俯賜矜俞、

梵訛重輝、山沢增氣、凡居聞見罔不歎欣。恭准皇帝陛下、如天鑑

觀得仏心法、念微言之易泯、參秘藏以並伝。先師臣宗呆植百劫之

勝因、逢千載之嘉會。公微有幸、得叨預於殊榮焚誦何功。冀仰酬

於大造、臣無任瞻天望聖激切屏營之至。乾道八年正月 日。徑山

能仁禪院住持慧日禪師臣蘊聞奏劄 (同、九四三-a-b)

とあつて入藏の決定に対する謝礼が付されている。奏劄について

福州東禪報恩光孝禪寺本寺承知府安撫大觀文公文備准御批、降大慧禪師語録十冊、令實之名山大藏中、以永其伝。住持臣僧德潛謹刊

為經板、計三十卷、入于毗盧大藏、用廣流通。以此功德、恭為今

上皇帝、祝延聖壽無疆、仰願皇國鞏固、鳳曆長新、仏日增輝、法輪常轉。乾道八年正月 日。住持臣僧德潛謹題 (同、八一-a-b)

とあつて德潛の刊記がある。ところで開元寺版では蘊聞の奏劄はなくて、德潛とまったく同じ内容の紹玉の刊記がある。

福州開元禪寺伏蒙判府安撫大觀文相公恭准御批、降大慧禪師語録十冊、令實之名山大藏、以永其伝。住持臣僧紹玉謹募檀信刊為經

板、計三十一卷、入于本寺印造毗盧大藏經院、用廣流通。以此功德、祝延今上皇帝、睿筭無疆、恭願蘿岡永固、鳳曆長新、仏日增輝、法輪常轉者。乾道八年正月 日。住持臣僧紹玉謹題 (宮内庁蔵宋版、参照、同、八一-d)

現在東禪寺版はみていないので詳細は述べることができないが、実は開元寺版には紹玉の刊記と同様な文は、土字函、寔字函の最初の卷十一、卷二十一にあり、徳潛と紹玉のそれぞれの刊記がある。

ここで東禪寺版三十卷が開元寺版の三十一卷となつたのは、不足の一巻を補つたのであるが、十冊の意味するところは各三つの字函のそれぞれの十巻であると思われるが、語録十巻とするのは三十巻のうち先の十巻のみを入藏しようとしたのか、語録十二巻までが一区切であつたのに、巻十までをはつきりと語録としようとしたあとがうかがわれるからそれを意味するのであろうか。

以上入藏の過程を通してははつきりと黄文昌の重編の位置は明確にはならない。改訂された年譜を謙虚によむと明かに黄文昌の重編を先としなければならないが、開元寺版が一巻ふえた理由に次のようなことがあげられるのではないか。つまり岩瀬文庫の元版や寛政十年本の『法語』の末尾に、

大慧禪師說法、四十余年、言句滿天下。平時不許參徒編錄、而衲

子私自伝写、遂成巻帙。晩年因衆力請、乃許流通。然在会有先後、見聞有詳略。又賢士大夫所得法語、各自宝藏、無縁尽観。今之所収、殊為未尽、俟更採集、別為後錄。文昌謹白（参照、同、九四三d）

とある。これは五山版の大慧書にもあるが、おそらく法語に對して書かれたのであって、同様の願いは黄文昌の重編のものにはすべてにあつたとみられよう。この不足一巻を付した開元寺版の内容は、長文の「普説」と「性道人請普説」と「示陳提挙」の法語である。最初の普説は『正法眼藏』の最後のもので、次の普説は他に見いだしえないもの、法語は四巻本普説の巻四の「続法語」の一つではあるが、紹興己巳（一一四九年）五月十二日の識語があるので新しい法語を見いだして加えたものであろう。黄文昌の伝記は明確ではなくわざかに『紹興十八年同年小録』に名がみえる程度である。

このようみてくると、紹興十七年（一一四七）に語録一冊がまとまり、隆興二年（一一六四）に張浚が跋を書いた時点で、道印の六十巻本が、黄文昌重編の五冊本として刊行され、この五冊本を母体として乾道七年（一一七一）の三月入蔵の願いがだされ、五月十九日に許されて、開版が進み、その年の十二月、翌年の一月に全部完成した。この完成は、東禅寺版も開元寺版も同じであつたが、開元寺版は『正法眼藏』の最後の法語を含んだ続巻が加えられた。その後『年譜』の

問題が生じ、宝祐元年（一二五三）に年譜が改められて重刊される頃、淳祐壬子（一二五二年）仲冬の尤焴の序が示すように、五冊本の重刊があり、同時に多くの大慧の著述が刊行されたのではないかろうか。

四 おわりに

前項で『大慧宗門武庫』の問題も解決すべきではあつたが、これは独立して述べても十分なほど多くの問題をもつているから次の機会に論じてみたい。また語録の形式についても詳細に検討をしなければならないが、紙数の関係もあるので次回に箇々の点は検討していくことにして、今まで述べて来たことがより明確になるので、巻一～巻六の上堂の整理だけを行なつて上堂の年代順を決める糸口となる一覧表を次に付して参考に供したい。

『大慈語錄』の上堂の年代順表

() は推定可能なもの。巻数は漢数字・上堂の順に通し番号をその巻ごとに示したのがアラビヤ数字。
拙稿「宏智広録考」の用例を参照。

六月二十五日	五祖師翁忌日上堂	七月五日	七月五日上堂	七月十五日	七月十五日上堂	八月五日	八月五日上堂	八月十五日	八月十五日上堂	九月一日	九月一日上堂	九月十五日	九月十五日上堂	九月五日	九月五日上堂	九月一日	中秋日上堂	九月十五日	九月十五日上堂	十月一日	十月一日上堂(開炉)	十一月	冬至上堂	十二月一日	十二月一日上堂	十二月八日	十二月十五日	十二月二十五日	十二月二十八日	他 の 上 堂 数	全 上 堂 の 通し 番 号	上 堂 の 合 計 数																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																			
一 1	一一 19	16	一一 19	二 20	二 35	三 36	三 13	四 14	四 29	四 30	四 43	五 1	五 7	五 8	五 34	六 16	六 27	六 30	六 11	六 21	六 12	六 26	五 4	五 14	五 30	五 33	五 36	五 37	五 38	五 39	五 40	五 41	五 42	五 43	五 44	五 45	五 46	五 47	五 48	五 49	五 50	五 51	五 52	五 53	五 54	五 55	五 56	五 57	五 58	五 59	五 60	五 61	五 62	五 63	五 64	五 65	五 66	五 67	五 68	五 69	五 70	五 71	五 72	五 73	五 74	五 75	五 76	五 77	五 78	五 79	五 80	五 81	五 82	五 83	五 84	五 85	五 86	五 87	五 88	五 89	五 90	五 91	五 92	五 93	五 94	五 95	五 96	五 97	五 98	五 99	五 100	五 101	五 102	五 103	五 104	五 105	五 106	五 107	五 108	五 109	五 110	五 111	五 112	五 113	五 114	五 115	五 116	五 117	五 118	五 119	五 120	五 121	五 122	五 123	五 124	五 125	五 126	五 127	五 128	五 129	五 130	五 131	五 132	五 133	五 134	五 135	五 136	五 137	五 138	五 139	五 140	五 141	五 142	五 143	五 144	五 145	五 146	五 147	五 148	五 149	五 150	五 151	五 152	五 153	五 154	五 155	五 156	五 157	五 158	五 159	五 160	五 161	五 162	五 163	五 164	五 165	五 166	五 167	五 168	五 169	五 170	五 171	五 172	五 173	五 174	五 175	五 176	五 177	五 178	五 179	五 180	五 181	五 182	五 183	五 184	五 185	五 186	五 187	五 188	五 189	五 190	五 191	五 192	五 193	五 194	五 195	五 196	五 197	五 198	五 199	五 200	五 201	五 202	五 203	五 204	五 205	五 206	五 207	五 208	五 209	五 210	五 211	五 212	五 213	五 214	五 215	五 216	五 217	五 218	五 219	五 220	五 221	五 222	五 223	五 224	五 225	五 226	五 227	五 228	五 229	五 230	五 231	五 232	五 233	五 234	五 235	五 236	五 237	五 238	五 239	五 240	五 241	五 242	五 243	五 244	五 245	五 246	五 247	五 248	五 249	五 250	五 251	五 252	五 253	五 254	五 255	五 256	五 257	五 258	五 259	五 260	五 261	五 262	五 263	五 264	五 265	五 266	五 267	五 268	五 269	五 270	五 271	五 272	五 273	五 274	五 275	五 276	五 277	五 278	五 279	五 280	五 281	五 282	五 283	五 284	五 285	五 286	五 287	五 288	五 289	五 290	五 291	五 292	五 293	五 294	五 295	五 296	五 297	五 298	五 299	五 300	五 301	五 302	五 303	五 304	五 305	五 306	五 307	五 308	五 309	五 310	五 311	五 312	五 313	五 314	五 315	五 316	五 317	五 318	五 319	五 320	五 321	五 322	五 323	五 324	五 325	五 326	五 327	五 328	五 329	五 330	五 331	五 332	五 333	五 334	五 335	五 336	五 337	五 338	五 339	五 340	五 341	五 342	五 343	五 344	五 345	五 346	五 347	五 348	五 349	五 350	五 351	五 352	五 353	五 354	五 355	五 356	五 357	五 358	五 359	五 360	五 361	五 362	五 363	五 364	五 365	五 366	五 367	五 368	五 369	五 370	五 371	五 372	五 373	五 374	五 375	五 376	五 377	五 378	五 379	五 380	五 381	五 382	五 383	五 384	五 385	五 386	五 387	五 388	五 389	五 390	五 391	五 392	五 393	五 394	五 395	五 396	五 397	五 398	五 399	五 400	五 401	五 402	五 403	五 404	五 405	五 406	五 407	五 408	五 409	五 410	五 411	五 412	五 413	五 414	五 415	五 416	五 417	五 418	五 419	五 420	五 421	五 422	五 423	五 424	五 425	五 426	五 427	五 428	五 429	五 430	五 431	五 432	五 433	五 434	五 435	五 436	五 437	五 438	五 439	五 440	五 441	五 442	五 443	五 444	五 445	五 446	五 447	五 448	五 449	五 450	五 451	五 452	五 453	五 454	五 455	五 456	五 457	五 458	五 459	五 460	五 461	五 462	五 463	五 464	五 465	五 466	五 467	五 468	五 469	五 470	五 471	五 472	五 473	五 474	五 475	五 476	五 477	五 478	五 479	五 480	五 481	五 482	五 483	五 484	五 485	五 486	五 487	五 488	五 489	五 490	五 491	五 492	五 493	五 494	五 495	五 496	五 497	五 498	五 499	五 500	五 501	五 502	五 503	五 504	五 505	五 506	五 507	五 508	五 509	五 510	五 511	五 512	五 513	五 514	五 515	五 516	五 517	五 518	五 519	五 520	五 521	五 522	五 523	五 524	五 525	五 526	五 527	五 528	五 529	五 530	五 531	五 532	五 533	五 534	五 535	五 536	五 537	五 538	五 539	五 540	五 541	五 542	五 543	五 544	五 545	五 546	五 547	五 548	五 549	五 550	五 551	五 552	五 553	五 554	五 555	五 556	五 557	五 558	五 559	五 560	五 561	五 562	五 563	五 564	五 565	五 566	五 567	五 568	五 569	五 570	五 571	五 572	五 573	五 574	五 575	五 576	五 577	五 578	五 579	五 580	五 581	五 582	五 583	五 584	五 585	五 586	五 587	五 588	五 589	五 590	五 591	五 592	五 593	五 594	五 595	五 596	五 597	五 598	五 599	五 600	五 601	五 602	五 603	五 604	五 605	五 606	五 607	五 608	五 609	五 610	五 611	五 612	五 613	五 614	五 615	五 616	五 617	五 618	五 619	五 620	五 621	五 622	五 623	五 624	五 625	五 626	五 627	五 628	五 629	五 630	五 631	五 632	五 633	五 634	五 635	五 636	五 637	五 638	五 639	五 640	五 641	五 642	五 643	五 644	五 645	五 646	五 647	五 648	五 649	五 650	五 651	五 652	五 653	五 654	五 655	五 656	五 657	五 658	五 659	五 660	五 661	五 662	五 663	五 664	五 665	五 666	五 667	五 668	五 669	五 670	五 671	五 672	五 673	五 674	五 675	五 676	五 677	五 678	五 679	五 680	五 681	五 682	五 683	五 684	五 685	五 686	五 687	五 688	五 689	五 690	五 691	五 692	五 693	五 694	五 695	五 696	五 697	五 698	五 699	五 700	五 701	五 702	五 703	五 704	五 705	五 706	五 707	五 708	五 709	五 710	五 711	五 712	五 713	五 714	五 715	五 716	五 717	五 718	五 719	五 720	五 721	五 722	五 723	五 724	五 725	五 726	五 727	五 728	五 729	五 730	五 731	五 732	五 733	五 734	五 735	五 736	五 737	五 738	五 739	五 740	五 741	五 742	五 743	五 744	五 745	五 746	五 747	五 748	五 749	五 750	五 751	五 752	五 753	五 754	五 755	五 756	五 757	五 758	五 759	五 760	五 761	五 762	五 763	五 764	五 765	五 766	五 767	五 768	五 769	五 770	五 771	五 772	五 773	五 774	五 775	五 776	五 777	五 778	五 779	五 780	五 781	五 782	五 783	五 784	五 785	五 786	五 787	五 788	五 789	五 790	五 791	五 792	五 793	五 794	五 795	五 796	五 797	五 798	五 799	五 800	五 801	五 802	五 803	五 804	五 805	五 806	五 807	五 808	五 809	五 810	五 811	五 812	五 813	五 814	五 815	五 816	五 817	五 818	五 819	五 820	五 821	五 822	五 823	五 824	五 825	五 826	五 827	五 828	五 829	五 830	五 831	五 832	五 833	五 834	五 835	五 836	五 837	五 838	五 839	五 840	五 841	五 842	五 843	五 844	五 845	五 846	五 847	五 848	五 849	五 850	五 851	五 852	五 853	五 854	五 855	五 856	五 857	五 858	五 859	五 860	五 861	五 862	五 863	五 864	五 865	五 866	五 867	五 868	五 869	五 870	五 871	五 872	五 873	五 874	五 875	五 876	五 877	五 878	五 879	五 880	五 881	五 882	五 883	五 884	五 885	五 886	五 887	五 888	五 889	五 890	五 891	五 892	五 893	五 894	五 895	五 896	五 897	五 898	五 899	五 900	五 901	五 902	五 903	五 904	五 905	五 906	五 907	五 908	五 909	五 910	五 911	五 912	五 913	五 914	五 915	五 916	五 917	五 918	五 919	五 920	五 921	五 922	五 923	五 924	五 925	五 926	五 927	五 928	五 929	五 930	五 931	五 932	五 933	五 934	五 935	五 936	五 937	五 938	五 939	五

この表の説明は次回にするが、語録のうち何が優先されたかというと、徑山、育王山、再住の徑山の上堂語である。生涯七十五年のうちのわずか八年程で、中間の空白の部分は神臂弓の事件で衡州に流罪となり、宏智の働きによつて六十八歳の十一月に育王山に住持まであるが、この表からも大慧の一生の波瀾の生涯が想像される。この間の説法ももちろん卷七以降で埋めることができが、禅者の語録の中で重きをなすものは上堂語であろう。今後の研究でさらに詳細に論じて行きたい。

最後に諸資料の調査において、立正大の大川富士夫助教授、大谷大学の栖川隆道氏、早稲田大学の山崎禪雄氏、愛知県の安部季久氏をはじめ、宮内庁書陵部、お茶の水図書館、岩瀬文庫、大東急記念文庫、金沢文庫に大変お世話になつた。ここに記して感謝申し上げる。

1 明藏には北藏と南藏があり、『古尊宿語録』四十八巻と同じように『密雲禪師語録』は北藏には欠いていたが南藏にはあつたものもある。

2 虎丘二十一世孫の広寿如一即非（一六一六—一六七一）の跋に

宋大慧杲和尚、隨機所説語録八十余巻、附藏流通、如大海汪洋渺無边际。一踏到底者、了悟滴之本空、眼底無筋、的見千波而競起。曇瑞柏岩二子、合資重補所未刻者一十二巻、以広其伝。欲令人人坐断澆天潮、共到薩波耶岸。其志可嘉、為題

其後、広寿如一揮書（正藏三一一四一三九三d）
とあるが、後に述べる大慧年譜の六十巻に多くの別行本の概算により八十余巻としたものであろう。

3 木宮泰彦博士著「日本古印刷文化史」一三三頁以下（富山房昭和四十年六月二十日再版）

4 天理図書館に所蔵された卷二十四と卷二十五が東禪寺版の一部分である。

5 木宮前掲書一三四頁。

6 同、一四五頁。小野玄妙博士「東寺經藏の北宋一切経について」（仏典研究第一巻）

7 木宮前掲書三五一頁に貞和三年（一三四七）頃の五山版の大慧語録の指摘があるが、おそらく成竇堂本がこれにあたるであろう。

8 伝説に過ぎないとする説に荒木見悟博士の「佛教と儒教」一九四頁以下（平楽寺書店昭和三十八年四月）があり、史実だとする説に久須本文雄教授の「朱子学禪考」一一六頁以下（禅學研究第五四号 昭和三十九年七月）などがある。

（一九七一・一二・一五）